

Toyo University



FACULTY DEVELOPMENT

News 第11号

発行／東洋大学FD推進センター

Contents

第Ⅲ期(平成23-24年度)のFD推進センター FD推進委員会の活動を終えて	p.1
平成24年度 一般教員FD研修会「グローバルゼ ーション下における大学教育の質保証～GPAの活用や シラバスの充実などの取組から～」	p.2
平成24年度 学部FD活動状況報告会	p.3
ToyoNet-ACEの機能追加 出席管理機能の概要と使い方について	p.4
「全学共通の授業評価アンケートの全学トライアルを 終えて」	p.5
Propell Workshop for the TOEIC Listening and Reading Test: TOEIC指導者向けワークショップ	p.6
各学部・研究科におけるFD活動	p.7～9
障がいのある学生への全学的支援体制の 構築について	p.9
学外FD関連研修会参加レポート 「教学IRワークショップシリーズ～退学予防策立案編～」	p.10
他大学との交流「関東圏FD連絡会」	p.10
GPAリーフレットの刊行	p.10
学生FD活動「2012年度関東圏FD学生フォーラム」	p.11
東洋大学FD推進センター 活動状況報告／活動計画	p.12

第Ⅲ期(平成23-24年度)のFD推進センターFD推進委員会の活動を終えて

副学長・FD推進センター長 神田 雄一(理工学部 教授)



昨年12月に開催された「学部FD活動状況報告会」における各学部の報告を、特別な感慨を持って拝聴しました。それは本学における全学的なFD活動は他大学より大きな遅れをとったものの、先の報告会は今年度で6回目を数え、その報告内容は各学部の自主的なFD活動の内容であり、会場においても良い取組みを皆で共有し、教育の質を高めようとする真摯な雰囲気満ちていたからであります。さて、第Ⅲ期委員会活動の基調は、教育の質の保証と向上、およびFD活動におけるPDCAサイクルの実践とし

ました。今期も5部会による活発な活動を展開していただきました。研修部会では系統的な研修プログラムの企画と実施をしていただき、特に新たな試みとして、多くの方に参加していただくため4キャンパスを授業配信システムで結び、夕刻に開催しましたが依然として参加者の急増にはつながらず、課題として残りました。大学院部会では、大学院独自のFD活動の検討をしていただきました。授業改善対策部会では授業改善事例シンポジウムを実施していただき、特に、学内授業支援システム「manabacourse」の活用に関心が高まりました。授業評価手法検討部会では全学共通の授業評価アンケート実施に向け、全学的にアンケートの試行を行い、次年度からの全学展開へ向けて、大きな成果をあげていただきました。編集部会では、『FDニュース』、『活動報告書』、『FDハンドブック(第2版)』の発刊、GPA導入に伴うリーフレットの作成など、いずれも精力的に実施していただきました。FD推進委員会委員の献身的なご尽力に感謝申し上げます。

また、平成24年度から学生FD研究チームとの連携を深めることが出来ました。これは、関東圏4大学(青山、法政、立教、東洋)のFD連絡会による協働が大きく寄与しました。本学の学生諸君が中心となる学生FD活動は他大学からも高く評価され、誇らしく感じます。

いよいよ平成25年度からは、全学でのGPA制度がスタートします。GPA導入の第一義の目的は、学生の修学意欲の向上にあります。本制度は学習指導体制と連動して活用することが重要です。きめ細かい学習アドバイスや学習ポートフォリオへの活用などにより、学生自身が自らの成績の位置付けが把握出来、学習意欲の向上に繋げることが期待できます。GPAを活用することにより学部、学科で独自の運用が考えられますので、有効な活用方法について議論いただきたくお願いいたします。

多様化した学生の教育、高度な研究の推進、地域社会への貢献など大学教員は多くの果たすべき役割を持っておりますが、本学のFD推進センターの活動範囲はまだほんの少しの境域をカバーしているに過ぎません。教学検討委員会第4次答申においては、特にグローバル人材の育成に関連して、語学教育に関するFD活動の充実強化が求められています。これらの課題も含めて、次期においては引き続き教員が教育について語り合う“場”としてのFD活動を通して更なる教育の質の向上に注力したいと考えております。皆様のご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成24年度 一般教員FD研修会 「グローバル化における大学教育の質保証 ～GPAの活用やシラバスの充実などの取組から～」

研修部会長 宮原 均（法学部 教授）

開催日時：平成24年10月19日（金） 18:30～20:00

場 所：白山キャンパス 5B12 教室、
朝霞キャンパス 講 306 教室、
川越キャンパス 511 教室、
板倉キャンパス 3301 教室、

※朝霞・川越・板倉キャンパスでは、授業配信システムを利用
対 象：本学教職員

平成24年度一般教員FD研修会を10月19日に行った。今回は「グローバル化に対応する大学教育」というテーマを設定し、授業配信システムを利用して講演に引き続き質疑応答を行い、他キャンパスに相互配信した。

講演は、国際基督教大学学長を2期8年務められ、現在、大学基準協会専務理事及び中教審大学分科会大学教育部会委員の鈴木典比古氏にお引き受けいただいた。内容は、大学教育の質を、世界で通用する基準に基づいて保証するための具体的な方法を考える、というものであった。

まず、大学教育の問題点が指摘された。世界に通用する人材の育成、大学生の授業に関連する学修時間、担当教員のコマ数、大教室授業にともなう授業の質・密度等を取上げ、これらはいずれも満足のいくものではなく、教育プログラム全体のガバナンス欠如がこれらに大きく影響を及ぼしていると分析された。（日本の大学教育3つの「ない」…「学生は勉強し『ない』」「教員は密度の濃い授業をし『ない』」「教学プログラムにガバナンスが『ない』」）。

そこで、3つの「ない」を「ある」に変えていくことが重要であるとされる。そのために、学生が主体的に予習・復習ができるようなシラバスを作成することが求められ、そして基礎科目から専門・応用科目を段階的に履修するコースナンバリング制が紹介され、教員主体の科目編成から学位プログラムを中心とした編成へと転換する必要性が強調された。具体的には、専攻分野の教育目標の明示化とこれに沿ったカリキュラムの体系化を進めると共に、全学的な教学マネジメントへの責任の明確化が重要であるとされている。

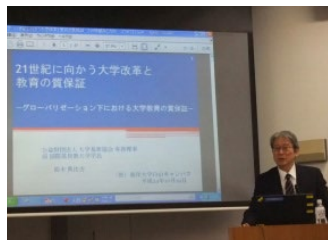
こうした主張の背景には、学士課程を「教育財の生産工程」としてとらえる考え方がある。学生が入学してから卒業まで、加工開始→加工仕掛品・部品→半完成品→完成品＝卒業・社会に有用な人材にまで加工

Program

1. 開催挨拶 …………… 学長 竹村 牧男（文学部教授）
2. 講演
「グローバル化における大学教育の質保証
～GPAの活用やシラバスの充実などの取組から～」
…………… 講師 鈴木 典比古氏
(公益財団法人大学基準協会専務理事、
前国際基督教大学学長、文部科学省中央教育審議会、
大学分科会大学教育部会委員)
3. 質疑応答
4. 閉会挨拶 …………… FD推進センター長・副学長 神田 雄一
(理工学部教授)

していかなければならない。この工程を前提として、大学は学生の質保証を行うために内部的なシステムが必要である。そのために、科目について、基礎～専門（初級～上級）まで、それぞれのレベルごとに番号を付し、更には、学習成果として知識～創造的思考までを4段階に分け、前者を縦軸、後者を横軸にとってカリキュラムのバランスを客観化するということである。これによって、国内・国外における単位互換を容易に行なうことが可能になる、とされている。

以上、大変に内容豊富で時間が足りず、質疑もあまり行えなかったのが残念であるが、少なくとも、風雲急を告げ、早急な改革の必要性を教職員が認識した講演であった。最後に、新たな試みとして、他キャンパスへの相互配信をはじめて行った。十分活用可能であることが分かり収穫であった。



ナンバリング制とは？

ナンバリング、あるいはコース・ナンバリング。

授業科目に適切な番号を付し分類することで、学修の段階や順序等を表し、教育課程の体系性を明示する仕組みで

①大学内における授業科目の分類 ②複数大学間での授業科目の共通分類、という二つの意味を持つ。

対象とするレベル（学年など）や学問の分類を示すことは、学生が適切な授業科目を選択する助けとなるため、

GPA制度やキャップ制と併用されることが望ましいと考えられる。

また、科目同士の整理・統合と連携により教員が個々の科目の充実に注力できるといった効果も期待できる。

出所：学士課程教育の質的転換の関連資料 - 文部科学省

平成24年度 学部FD活動状況報告会

授業改善対策部会長 堀口 文男（総合情報学部 教授）

開催日時：平成24年12月22日（土） 13：30～16：30
会 場：白山キャンパス6号館6203教室

本報告会は10学部それぞれの活動状況を明らかにすることにより、改善・改革のための知見や方法などを皆で共有することを目的として平成19年度より開催しています。

平成22年度からは、10学部からの発表を2年間のサイクルで実施することとし、昨年度は経済・法・国際地域・ライフデザイン・総合情報の5学部、今年度は文・経営・社会・理工・生命科学の5学部からプレゼンテーションが行われました。

テーマは「教育の質保証のためのPDCA」とし、近年盛んに行われるようになった各学部の特徴に即したFD活動について情報共有をし、改善・改革のための方策などについて熱心な議論が行われました。

はじめに、竹村牧男学長より「FD活動は組織的に取り組むことが大切である。本学創立125周年を迎え、これからの輝かしい150周年に向けた着実な一歩となるような報告会にしてほしい」との挨拶をいただきました。続いて各学部からのFD活動報告がありました。文学部・中山尚夫学部長は、学科毎に学びの仕方を示した『学習の手引き』を紹介された後、複数教員で担当する「基礎ゼミ」科目における初年次教育について報告されました。「春学期は共通テーマのためシラバスを統一し、春学期終了時に担当教員は振り返りのミーティングを行い、同時に学生へのアンケートを実施し、次年度以降の授業改善に生かす取り組みをしている」とのことでした。

経営学部・旭貴朗学部長からは、学生の卒業時アンケートを起点とした教育への満足度を向上するための取り組み事例として、英語力強化への対策「GBC（グローバル・ビジネス・コミュニケーション）コース」、演習と卒論指導の改善、学習支援・資格取得支援活動について報告がありました。これらの取り組みに関する充実度合いを卒業時アンケートで調査することにより、学生の学修成果指標の向上を図っているとの事です。また、ステークホルダーの保護者・OB・OGの方々を対象にした様々な企画も行い、就職・キャリアの対策も推進しています。

次に社会学部・王亜新教授（学部長代行）からは、学部内主催のFD企画である「GPA講演会」、熱海研修センターで合宿を行う「第2回新任教員研修会」さらに「関西大学視察」について報告がありました。「これらの活動を通して、国際化に対応したセメスター制の導入や、語学および教養教育科目の充実、カリキュラムの改善などの重要性が教職員間で共有でき、充実した教育を保証する体制を構築することを目指している」と報告されました。

引き続き理工学部・吉田泰彦学部長からは、学力保証を目的に「基盤教育科目の取得単位」を全学共通で、「理工学部共通科目の修得」を理工学部生として最低限必要な科目群と位置付けていることが強調され、この教育方針を実現させるために、①「FDカルテ」を数学・物理・英語科目担当教員の非常勤講師全員が提出

Program

1. 開催挨拶 …………… 学長 竹村 牧男（文学部教授）

2. 報告会

①学部からの報告 …………… 学部長

文学部
経営学部
社会学部
理工学部
生命科学部

②全学FD活動の取り組み …………… FD推進センター長

3. 総括・閉会挨拶 … FD推進センター長・副学長 神田 雄一
（理工学部教授）

すること②全学科全学年の必修科目の出席状況を調査し、出席不良学生・保護者に連絡をし、科目履修に関しての指導を行っていること③成績表を基に学生とその保護者の方との面談を行う学修相談会を、年2回実施していること④GPAに関する勉強会やFD講演会を開催していることなどが報告されました。また、数学と英語の学力向上を図るための学習支援室の活用については、教務委員が中心となって4月に実施するアチーブメントテストの結果に基づき、対象学生には支援室の訪問を呼びかけ、学習への動機づけを行っていることも報告されました。

最後に生命科学部・岡崎渉学部長からは、「授業アンケートおよび授業改善レポート」の実施、「新入生基礎学力調査と学習支援プログラム」、「FD推進会議への派遣」、「分析機器教育プログラムの導入」、「英語による生命科学分野の理解力育成」、「単位僅少者への面接実施」、「学外協力活動（JST 女子中高生の理系進路選択支援プログラム、高校理科教員に対する生命科学実験講習会の実施、産官学連携活動など）」について報告がなされました。

プログラムの最後に、神田FD推進センター長より、全学FD推進センターの活動状況および課題、平成25年度より全学導入するGPA制度と授業評価アンケートなどについての報告がなされました。引き続き、総括として「各学部が意欲的に独自のFD活動を展開している」「教育の質保証に対して各学部の特徴を活かした取り組みが行われている」など実りの大きい報告会であったと締めくくりました。

参加者からは、他学部による具体的取り組みを知ることが有意義であった、学力低下が叫ばれるなか、学生の底上げとともに上位層のレベルアップを支援する取り組みが必要である、などの貴重な意見をいただきました。

ToyoNet-ACEの機能追加にむけて 出席管理機能の概要と使い方について

情報システム課 主任 藤原 喜仁

ToyoNet-ACE に出席機能が追加されます。これにより、携帯電話・スマートフォンなどを用いて ToyoNet-ACE 上で学生の出席管理を行うことができます。また、学生の出席情報は、成績の一部として登録することもできます。

ただし現在教室の電波改善も同時に進めているため、地下の教室・建物がアンテナをささぎっている教室など、繋がりにくい箇所があります。平成 25 年度秋学期からの本稼働を目標としていますが、全キャンパスの整備が整い次第、正式にご案内します。現在はプレテストを行っておりますので、ご協力いただける先生は、情報システム課 ToyoNet-ACE 担当までご相談ください。

出席提出は以下の流れで行います。

手順 1. ToyoNet-ACE で出席カードを発行

授業前にあらかじめ ToyoNet-ACE の機能を使って出席カードを発行しておきます。出席カードに表示されている 7 桁の受付番号は、学生が出席カードを提出する際に必要になるキーです。

手順 2. 出席をとる

授業中に学生に携帯電話から hi.toyo.jp にアクセスさせ、出席カードを提出させます。この時、学生に受付番号を案内して下さい。

出席カードの提出（出席機能）



学生は、出席カード提出画面で ToyoNet-ACE の ID、パスワード、受付番号 (A) を入力します。

出席カードタイプ「出席」(学生の出席確認のみ行うもの) の場合、「送信」ボタン (B) を押すと出席カードの提出が完了します。

※スマートフォンでない携帯電話でも可能です。

手順 3. 出席情報の管理

授業後に学生の出席情報の管理を行います。

携帯電話を忘れた、圏外で提出できなかった、などの理由で出席カードを提出できなかった学生の出席情報を変更します。また、「出席」から「遅刻」「早退」などに情報を変更することができます。

並び: 姓順 学籍番号順 提出日時

氏名	学籍番号	提出日時	出欠	メモ
山田 太郎	12345678	2012-12-20 16:28:19	出席	
田中 花子	87654321	2012-12-20 16:28:19	出席	
佐藤 一郎	11223344	2012-12-20 16:28:55	早退	
鈴木 健二	55667788	2012-12-20 16:28:19	遅刻	電車遅延
高橋 美咲	99887766	2012-12-20 16:28:19	出席	
伊藤 雄介	22334455	2012-12-20 16:28:19	出席扱い	携帯電話忘れ
渡辺 真由美	66778899			

更新

出席情報は Excel シートでダウンロードすることもできます。ダウンロードした Excel ファイルは ToyoNet-ACE で成績として登録し、学生に公開することができます。

提出状況の確認

教員画面の「出席カード一覧」から「提出状況」ボタンを押すと、件数や提出者名とともに、棒グラフ・円グラフをリアルタイム表示します。



【提出状況確認画面：出席】

全学共通の授業評価アンケートの 全学トライアルを終えて

授業評価手法検討部会 部会長 長谷川 勝久

授業評価手法検討部会では、平成 23 年度から、これまで各学部が個別に実施していた授業評価アンケートについて、本学の教育改善に資する取り組みとしてより一層確立させるために、全学共通で実施することを検討してまいりました。

平成 23 年度は、4 月から 6 月にかけて 10 学部で共通している質問項目の抽出を行い、7 月には抽出した質問項目の妥当性についてのアンケートを全学部の専任教員を対象に実施いたしました。その結果を踏

まえ、8 月以降、質問項目の精査や、アンケート結果をどのようにフィードバックすれば授業改善につなげることができるかについて検討を行い、全学共通の授業評価アンケートの原案を作成いたしました。

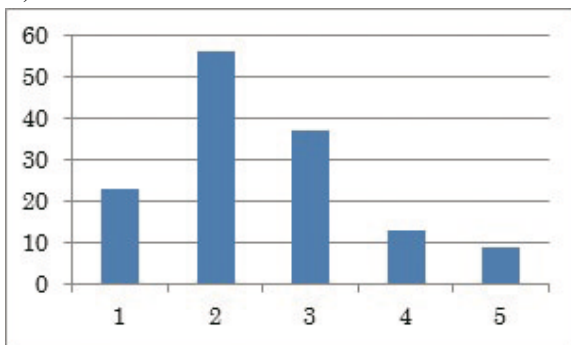
平成 24 年度には、春学期に FD 推進委員によるトライアルを 39 科目で実施し、その検証を行い、秋学期には全学でのトライアルを 10 学部 1,578 科目で実施していただきました。学部学科及び先生方のご協力に心より御礼申し上げます。

	実施予定科目数	実施科目数	未実施科目数	実施科目履修者数	有効回答者数	回答率
文学部	347	340	7	27,213	15,262	56.08%
経済学部	2	2	0	116	75	64.66%
経営学部	163	157	6	18,471	7,714	41.76%
法学部	94	94	0	12,720	5,722	44.98%
社会学部	230	213	17	21,844	11,522	52.75%
国際地域学部	122	120	2	8,789	5,850	66.56%
理工学部	256	254	2	19,619	12,941	65.96%
生命科学部	173	165	8	10,525	8,554	81.27%
ライフデザイン学部	133	131	2	11,114	7,439	66.93%
総合情報学部	104	102	2	6,728	4,394	65.31%
合 計	1,624	1,578	46	137,139	79,473	57.95%

以下は、全学でのトライアルの結果表を各先生にお戻しした際に、ご協力をお願いいたしました「結果表等についてのアンケート」の集約結果です。

アンケート① 出力帳票の情報は、授業改善をするための情報として分かりやすかったですか。

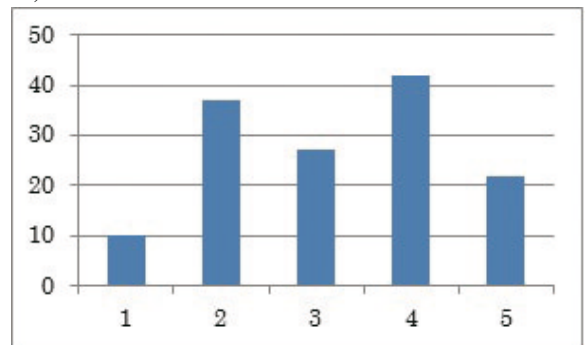
(人) n=138



1. わかりやすい
2. わりにわかりやすい
3. どちらとも言えない
4. ややわかりにくい
5. わかりにくい

アンケート② 出力帳票の情報は、授業改善に役立つと思いますか。

(人) n=138



1. 役に立つと思う
2. どちらかという役に立つと思う
3. どちらとも言えない
4. どちらかという役に立たないと思う
5. 役に立たないと思う

これらの結果から、今回の出力帳票が授業改善に役立つという点においては、一定の評価を得られたと思われます。しかしながら、出力帳票の分かりやすさにつきましては、もっと見やすい工夫をすることが分かりました。また、自由記述部分においても、「これ以上よくできたものはない」というご意見から「わかりにくく役に立たない」というご意見まで様々であり、この点につきましては、平成 25 年度の正式導入に向けて、改良を検討していきたいと思ひます。

先生方からのご意見につきましては、大変参考になりました。厚く御礼申し上げます。

Propell Workshop for the TOEIC Listening and Reading Test :TOEIC指導者向けワークショップ

Date: Wednesday, 19 September,
2012 10:00 a.m.–18:00 p.m.
Location: Hakusan Campus, Toyo University
Facilitator: Assessment Specialist of the TOEIC® Tests from ETS
Host: Educational Testing Service (ETS)
The Institute for International Business Communication (IIBC)

昨年度に引き続き、本学における国際化推進の一環として英語担当教員を対象に、FD研修の一環としてTOEIC指導者向けワークショップを開催しました。

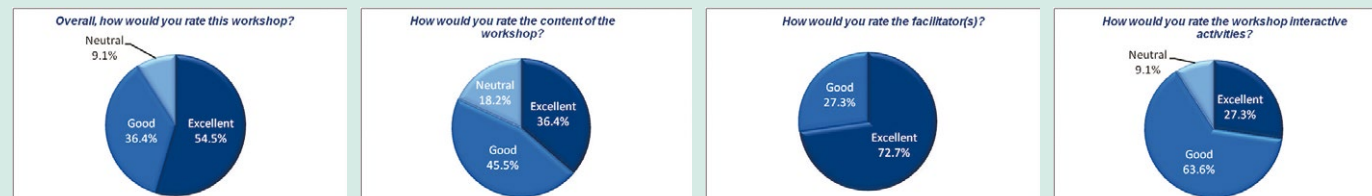
英語教育を通じてグローバル人材を育成する目的のもと、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会よりアメリカから講師を迎え、実践的なアクティビティが行われました。TOEIC試験の概要のみならず、学生の英語コミュニケーション能力の向上に示唆するための指導方法についても学ぶことが出来る貴重な機会となりました。

東洋大学では国際化推進に向けて、語学留学制度（学外・学内）、試験対策講座、奨学金制度など、多方面にわたって学生が国際的に活躍できる体制を構築しておりますので、教員の皆様もご協力宜しくお願いいたします。

<Workshop Schedule>

- 10:00 – 11:30 • Workshop Objectives
 - About the TOEIC test
 - Score Descriptors
- 11:30 – 11:45 • BREAK
- 11:45 – 13:15 • Learning Objectives
 - Teaching and Learning Strategies
- 13:15 – 14:15 • LUNCH BREAK
- 14:15 – 15:45 • Teaching and Learning Strategies
- 15:45 – 16:00 • BREAK
- 16:00 – 18:00 • Learning Activities
 - Assessment for Learning
 - Evaluations and Closing

<questionnaire results>



Comment

By Tim Newfields (Faculty of Economics)

On September 19th I attended a TOEIC training workshop sponsored by Educational Testing Services, Inc. Since the TOEIC has been around over 20 years and many of the participants have attended other workshops about the TOEIC and/or developed TOEIC preparation materials, there was actually nothing new about the TOEIC mentioned in this workshop. The information that I did want to know (such as precisely how TOEIC scores are computed or what a pure random guess score would be) I am afraid that the presenters refused to answer since they were considered “ETS trade secrets.”

The one valuable thing I did gain from this workshop was a chance to network with other English teachers at Toyo University. Teachers discussed a variety of ways that they tried to develop the English listening, reading, speaking, and writing skills of their students. Whereas some teachers focus on explicitly teaching TOEIC-like problems during class, others focus more broadly on developing overall language skills in a

communicative context. The presenters cautioned against teaching TOEIC drills too explicitly. They said such activities might superficially raise test scores slightly as a result of test familiarity and “test wiseness”. However, they made it clear focusing on real-life communicative skills was the best way to enhance overall TOEIC scores. Predictably, they maintained that the TOEIC is a valid measure of communicative English ability in international business contexts.

To be candid, I felt ambivalent about this workshop. It was a good opportunity to network with other English teachers. However, because the presenters had a commercial stake in promoting the TOEIC, there was a lack of critical inquiry about that test. I believe that a better way to conduct future faculty development programs would be to invite persons from various academic associations to conduct independent training sessions. For example, the Japan Association for Language Teaching’s (JALT) Teacher Education SIG or Japan Association of College English Teachers (JACET) conducts regular training sessions. Independent trainers can be most honest about the merits and demerits of the TOEIC.

各学部・研究科におけるFD活動

社会学部 関西大学視察

社会学部 教授 王 亜新

2012年12月11日(火)に、社会学部青木辰司学部長を始め、教職員一行8名が関西大学社会学部を訪れ、社会調査実習など社会学専門教育を中心に視察を行った。

関西大学社会学部は、教員約60名、学部生約3,500名で、東洋大学社会学部とほぼ同じ規模である。同じ社会学部を有する他大学を視察することにより、これからの教育改革・改善に何らかのヒントが得られると考え、今回の視察が企画されたのである。

今回の視察は、主に次の分野を対象としている。

1. 社会調査実習関連教育

関西大学では「社会調査実習」は、選択科目として位置づけられ、毎年1科目のみ開講されている。履修生は基本的に「社会調査士」取得希望者で、履修者数は毎年20～50名、「社会調査士」の資格取得者も毎年20～30名で推移している。調査実習科目の担当は「主担」（専任教員）と「副担」（非常勤教員）さらに大学院生TAによる補助という「集団指導体制」をとっているため、担当教員の負担が大幅に軽減され、学生へのきめ細やかな指導も可能になっている。そのため、「調査実習」を選択した学生のモチベーションも総じて高い、と紹介されている。

2. キャリア育成関連教育

関西大学では全学的なキャリアセンターが設置され、各学部からの教員（キャリアセンター主事として）がセンターの運営に参加している。職員は専任20数名、非常勤10数名からなり、12～3月は派遣職員の相談員を増やして対応している。センターには「キャリアデザインルーム」が設けられ、5名のアドバイザー（専任1名、非常勤4名）が常駐して学生の進路の悩みの相談にあたっている。また、日曜日などを利用して父母対象の説明会を開催し、さらに卒業した学生の面倒もみていると紹介されている。

授業では、1年次秋学期から演習等を通じてキャリア教育を実施し、各専攻の中でいくつかのコース（プログラム）に分けて履修のロール

モデルを示すとともに、将来の就職先を意識させるという教育を行っている。

3. 初年次教育

関西大学社会学部における初年次教育は、各専攻によって行われ、1年次に「基礎研究」などの科目が設けられ、資料の調査収集やレジュメとレポートの作成方法など大学で学んでいくための基礎的スキルを身につけるための授業が用意されている。専攻ごとに特色があり、学問の広がりへの気づきを促す積極的な取組みがなされている。また、担当者はオムニバス形式で全教員が指導にあたっている。授業も教授会日に配置されているので、担当者間で時間を調整しやすく、負担も軽減されるような工夫がなされている。

4. 全体の印象

関西大学は、キャンパスが広く、開放的な雰囲気があり、学部ごとに校舎が異なっている点では学部の自立性が高いと同時に、各学部の「タコソボ化」の問題も生じやすく、それを解消するために、学部内でFD関連会議を始めているという。一方、広いキャンパスではカリキュラムを弾力的に運用でき、同一科目の増コースも簡単にできるので、1クラスの受講生が少人数に抑えられ、学生の満足度が高いなどの利点がある。

関西大学を視察する際、社会学部の小川学部長を始め、清水副学部長、社会調査実習担当教員およびキャリアセンター担当主事などが親切に対応し、4時間半にわたって率直に学部の状況を紹介し、かつ施設を案内してくださり、たいへん有意義な時間となった。

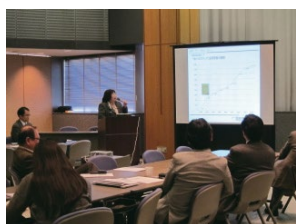
今回の視察を通じて、他大学の状況を知ると同時に、本学が有している長所と短所を浮かび上がらせ、いままで意識していなかった課題も浮かび上がるようになり、今後の教育改革・改善により参考となっている。社会学部としては、次年度以降も同様の視察活動を継続し、定期的に他大学と情報交換を行っていくことを計画している。



経済学部 FD講演会を開催

経済学部 教授 曾田 長人

経済学部ではここ数年、毎年11月か12月、外部講師の方に来ていただき、FD講演会を開催している。今年度のFD講演会は12月13日(木)スカイホールにおいて15時30分より17時5分に至るまで行われた。講師は関西国際大学高等教育研究開発センター長の上村和美教授。テーマは「関西国際大学における初年次教育の取り組みについて」。上村先生のご専門は言語文化学だが、初年次教育に関する業績が多くあり、先生は経済学部のゼミIの一部のクラスで用いられている『知へのステップ—大学生からのスタディスキルズ—改訂版』(くろしお出版、2006年)の著者の一人でもある。今回、FD先進大学での取り組みから初年次教育のあり方について学ばせていただくという狙いで、上村先生に来ていただいた。講演への参加者は、教職員を合わせて20数名。以下、講演の内容を要約する。



最初に『知へのステップ』誕生に至る経緯をお話いただいた。関西国際大学は他大学に先駆けて初年次教育の学習技術、つまり考えることを

中心に据え「聴く、読む、書く」総合的な能力の開発と取り組んだ。引き続き関西国際大学の「学習技術」について紹介があった。同大学では全四学期の各学期、初年次教育に関する科目を開講し、再履修者のため特別なクラスを設けている。

授業では毎回ワークシートの実践、提出を義務付けているとのことであった。さらに「学習技術」の教材、特にワークシートの構成について解説があり、ワークシートはスキルを身につけるためのしかけであるとの説明が行われた。最後に「学習技術」の授業と評価について述べられ、学期末に2,000字程度のレポートの提出を義務付けていること、再履修クラスの運用等に関して言及された。まとめとして、1年生の基礎的な学習能力が初年次教育により総体として向上したのではないかとのことであった。

講演の終了後、活発な質疑応答が行われた。講演の全体から、関西国際大学が新生生に対して熱意をもって、きめの細かい指導を行っていることが理解できた。初年次教育についてはその重要性が近年、多くの場で指摘されつつある。今回の講演は、経済学部での今後の初年次教育について考える、よい機会となった。

国際地域学部 「日本の国際人材と国際バカロレア」についての講演会を開催

国際地域学部 教授 久松 佳彰・子島 進

10月11日(木)午後1時より、白山第2キャンパスB210教室において、国際地域学部(ファカルティ・デベロップメント(FD)委員会、イメージ教育委員会)は、学校法人加藤学園(静岡県沼津市)のマイク・ポストウィック博士をお招きし、「日本の国際人材と国際バカロレア」についての講演会を開催しました。加藤学園は、国際バカロレア機構加盟認可校である暁秀高等学校・中学校(沼津市)を運営しており、ポストウィック博士は同校において国際バカロレア・プログラムの創設より、指導にあたってこられました。

国際バカロレア資格とは、「全人教育」の理念に基づき、各国の教育制度や教育内容に縛られず、国際的な通用性を目指した大学入学資格になっています。相当な学習量と質が求められる授業科目だけでなく、課題論文の執筆やクリティカル・シンキングの活動が本格的に行われています。この国際バカロレアについては、大学時報(2012年9月号)に教育ジャーナリスト渡辺敦司氏が『国際バカロレアがもたらす“衝撃”』で述べているように、政府が2012年6月にまとめた「グローバル人材育成戦略」にも記述されています。本戦略では、政府が国際バカロレアを高校で広げようとしていることが明らかになりました。もちろん、その影響については、一方では一部の高校(二百校程度)に限られるとして、卒業生の受け入れ先となる大学教育全体には影響が限定的だと考えることもできますが、他方では、国際化の対応として高等教育から大学教育に突き付けられる大きな刺激になると考えることもできます。そういう意味で、国際バカロレアを早くから日本で展開されている加藤学園の経験をお聞きすることは有用であるとして、講演会を開催いたしました。

ポストウィック博士は講演の中で、同校で中学から高校一年までの学習で導入している英語によるイメージ教育や高校2・3年

で行われる国際バカロレア認定プログラムの内容、中高の教育課程全体を通じて行われる content-based instruction の概要を説明し、加えて、生徒の卒業後の進路や生徒自身の国際バカロレア教育への感想などを紹介されました。課題論文の実物もお持ちいただき、その質に参加者は刺激を受けました。その後の質疑応答では国際バカロレア教育について活発な意見交換が行われ、結果として今後の国際地域学部の国際化教育の発展に向けた取り組みを考える上で有意義な講演会となりました。

2012年9月に文部科学省による『グローバル人材育成推進事業 Type B』に採択された国際地域学部では、国際人材についての世界での育成動向、そして高校段階での人材育成にも目を配りながら、一層の教育努力を続けていくことが重要だと考えています。今回の講演会から、学部内のファカルティ・デベロップメントだけでなく、学部内のグローバル人材育成推進事業、イメージ教育委員会の活動および、同委員会に支えられた英語特別プログラム副専攻(国際地域学科のみ)の活動にも大きな刺激と示唆を与えられました。

参 考)

国際バカロレア機構(IBO)は、IBOの要求する基準を満たした学校に対して教育カリキュラムを提供している。

現時点では100以上の国で世界各地に13,000校を超す学校が加盟し、欧州会議に認定され、ユネスコの諮問機関としての働きもしている。

IB認定校のディプロマ取得は世界中の主要大学へ入学する資格として認定されている。

生命科学研究科・生命科学部 「FD講習会」を開催

生命科学部 教授 根建 拓

生命科学研究科・生命科学部は、昨年に引き続き「FD講習会」を12月21日（金）15時30分から板倉キャンパス2号館2205教室で開催した。

生命科学部では卒業研究・卒業論文が必修となっているため、学部4年生はほぼ毎日研究室へと足を運び、研究活動を行うこととなる。さらに、この生活スタイルは大学院進学後も基本的に継続される。一方で、昨今の学生の多様化により、画一的な研究指導方法では教育が難しくなっている現状があり、学生の研究指導を行う上で、個性にあわせた教育を行うことの必要性が問われている。そこで今回、本学文学部教育学科より緒方登士雄先生をお招きし、「多様化する学生に対する研究指導のあり方」についてご講演いただいた。

講師をお願いした緒方先生は、教育心理学をご専門とされており、さらに本学学生相談室とも緊密な関係を保たれている。従って、本学学生の多様化の現状に即した最適な指導方法を考える上で非常に有用な講習会となった。まず、本学学生の多様化の状況について匿名性に配慮した事例紹介を行っていただき、そのような学生に対する教育方法のアイデアを紹介していただいた。特に、学生のサポートは教員のみで解決をはかろうとするのではなく、学生相談室等との連絡・協力体制を整えながら行っていくことが重要であるとのことであった。

その後の質疑応答では、教員から多くの質問がよせられ、活発な意見交換が行われた。例えば、特例的な聴講スタイルをどこまで許容すべきか、特例的な採点基準をもうけることの是非などについての質問・意見があった。これらの質問・意見に対しては「学生の立場・状況」および「研究科・学部・教員の教育方針」という二つの要素があるため、安易に答えを出せる問題ではないが、今後、研究科・学部・学科内で議論を深めていくべき問題であろうとのことでもまとまった。

今回の講習会では、非常に真剣な踏み込んだ意見交換が行われたことが印象的であった。このことは、生命科学研究科・生命科学部において、多様化する学生に対して最適な教育方法を模索している教員が多いことを物語っている。さらに、参加した教職員の間では、今後は講習会以外の機会であっても活発に意見交換を行うことが重要であるとの見解で一致した。生命科学研究科・生命科学部FD推進委員会としても、このような活動を後押しすべく、今後ともこのような講習会を積極的に開催し、学部・大学院教育の更なる充実を目指していきたい。

障がいのある学生への全学的支援体制の構築について

学生部 次長 太田 幸子

東洋大学の障がいのある学生の支援は、平成9年より学生生活委員会のもとに「障がい学生小委員会」を設置して、視覚障害・聴覚障害・肢体不自由等の身体に障がいのある学生を対象に教育的措置を講じてきました。平成24年度の障がい学生の在籍状況は手帳保有者が39名おり、うち6名（視覚障害1名・聴覚障害4名、肢体不自由1名）から支援申請がありました。年間約1,000コマの授業にノートテーカーを配置したり、授業中の配慮依頼などを行っています。ノートテーカーは主に学生ボランティアによるもので、支援スタッフとして登録してもらい、講習会にも参加してスキルを磨いてもらっています。

大学のユニバーサル化が進み多様な学生の受入が実現し、障がい学生の入学も増加傾向にあります。とりわけ発達障害の診断のある学生やその疑いのある学生が入学後、修学に困難を抱え、学生本人や教員から相談が寄せられるようになりました。現行では、主に相談が寄せられる学生相談室と教員との連携で個別的配慮を行っていますが、全学的な支援体制を整えていく必要があります。12月に学外で行われた発達障害支援関連研修会では多くの大学担当者が参加しており、支援について試行錯誤している様子がうかがえました。

また、文部科学省より平成24年12月25日付で「障がいのある学生の修学支援に関する検討報告（第一次まとめ）」が通知されました。ここには、大学等における障がいのある学生への教育上の合理的配慮の提供が求められると明記されています。

今後は、身体に障がいのある学生のみならず、何らかの障害を抱

えた学生の修学機会を保障する配慮を組織的に講じていかなければなりません。

そのため、発達障害等を含めた障がい学生の全学的支援に向けて規程の整備に取り掛かり、その結果、修学環境の改善を検討する全学障がい学生支援委員会が平成25年度より発足する運びとなりました。と同時に専門知識のある教職員を配置する障がい学生支援室を白山キャンパスに設置することが決定しました。白山以外のキャンパスへの設置も急がれるところですが、まずはスタートラインについて出ることから始め、障がいのある学生の相談窓口を周知し、どこに相談すればどんな支援を受けることができるか情報を提供し、全学で連携して支援を行うべく改善を図っていく予定です。修学環境のバリアフリー化は、障害の有無にかかわらず学生や教職員にも有益な影響をもたらすことと思います。



平成24年12月 手話講習会実施風景

学外FD関連研修会参加レポート 「教学IRワークショップシリーズ～退学予防策立案編～」

共通教務課 海野 愛紗・中村 智治

教務に携わる職員としての日常の業務は IR の機能の一つである「個別大学内での改善のための調査・分析」に直結しており、教学 IR に関する知識を持ち業務にあたるための情報収集の一つとして本セミナーに参加することとなった。このセミナーは講義とワークショップから、中退予防に関する調査、分析、対策立案の考え方、IR の実践的なノウハウを学ぶことを目的としている。

講師の山本氏によれば、退学(中退)とは「ミスマッチ」からくる「逸脱」であるという。学生が求めるものと大学が提供している教育内容・方法のミスマッチ、学生の自身の経済的事情やソーシャルスキルなどの修学環境維持条件の不足というミスマッチ、そして大学と社会とのミスマッチ(学歴価値の低下等)。この3つに類型化される要因によって、学生は卒業する前に大学から逸脱し、退学してしまう。すなわち、中退予防のための施策を推進することは中退予備者のみならず、大学全体の教育力や学生満足度の向上につながるものである。しかしながら現在、大学側の考える退学(逸脱・不適応)に至る原因及びそれに対する予防策と、学生側の考える退学理由・原因は必ずしも適

合していない。ニーズがどこにあるのかを見極め、それにあった対策を優先して行うことが求められる。

講義を踏まえ、ワークショップは架空の大学の①中退の現状に関するレポートの分析、②中退データからレポートを作成するために必要な手順(事実の考察、解釈、リサーチプランの立案)をグループディスカッション形式で考えていった。

参加者は教員や実務経験の豊富な職員が大半であり、教学 IR の観点を迅速かつ着実に施策に反映させていくことが各大学でどれほど重要と捉えられているかを伺わせるものであったが、同時に参加者がデータの抽出そのものより、本ワークショップのように異なる立場・視点を持った人間がそれぞれにデータを分析し、意見を交わす環境を構築することが非常に重要で、なおかつ現時点では成し得ていないことであると語っていたことが印象的であった。教育の内部質保証としての教学 IR システムの構築の第一歩は、まずこの環境を確保できるかどうかにかかっていると云えよう。

他大学との交流「関東圏 FD 連絡会」

平成 21 年度より青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学の FD 担当者が集まり、同規模の私立大学が抱える FD 活動の問題解決と情報収集を目的とした意見交換会を開催しています。平成 22 年度より学生 FD スタッフも各大学から集まり、イベント等を実施しました。次年度以降は各大学において学生の主体的な FD 活動を支援することとなりますが、本連絡会は継続し相互に研磨していきます。

第 10 回

日 時：2012 年 9 月 26 日(水) 15:30～17:30

場 所：青山学院大学 青山キャンパス
17 号館 3 階 17306 教室

参加者：青山学院大学、法政大学、立教大学、
東洋大学の FD 担当者 計 19 名

概 要：①各大学における FD 活動状況報告
②学習支援体制について(情報交換)
③「関東圏 FD 学生連絡会」について
(学生 FD スタッフの位置付け、学外 FD 企画参加経費の支援方法等)

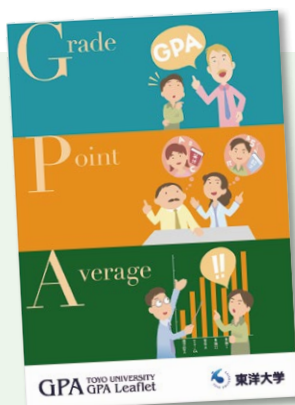
第 11 回

日 時：2013 年 1 月 23 日(水) 15:30～17:05

場 所：法政大学 市ヶ谷キャンパス
ボアソナード・タワー 19 階 D 会議室

参加者：青山学院大学、法政大学、立教大学、
東洋大学の FD 担当者 計 12 名

概 要：①各大学における FD 活動状況報告
②「関東圏 FD 学生連絡会」について
(2012 年度活動報告及び 2013 年度以降の活動体制)



『GPAリーフレット』を刊行

2013 年度の入学生より、GPA (Grade Point Average) 制度を導入することになりました。本リーフレットは、その概要とともに、導入の背景や、導入の際に検討された内容などをご紹介しますので、各先生方に GPA についてご理解いただくことを目的に作成しました。

FD 推進センターホームページ (http://www.toyo.ac.jp/fd/tahd_j.html)
からもダウンロード出来ますので、ぜひお役立てください。

学生FD活動「2012年度関東圏FD学生フォーラム」

主催：関東圏FD学生連絡会／学生代表 文学部教育学科4年 曾根 健吾

第1回「受けたくなる、よい授業とは」

2012年9月17日(月)に、白山キャンパス6号館にて「2012年度関東圏FD学生フォーラム～受けたくなるよい授業とは?～」を開催した。東洋大学、法政大学、青山学院大学、立教大学の学生FDスタッフと教職員で構成される関東圏FD学生連絡会は、イベント等の開催を通して学生の主体性を高め、大学教育の質向上を目指すことを活動の柱の一つとしており、その一環として学生・教員・職員参加型のフォーラムを開催した。

午前中は、杉山憲司本学副学長による開催あいさつの後、最初に関東圏で学生参画型FD活動に取り組む横浜国立大学と嘉悦大学から取り組み状況の報告があった。次に、よい授業について考えるきっかけづくりとして、「偏差値は悪者か?」というテーマで本学文学部教育学科の長谷川勝久先生に公開授業をしていただいた。参加者はクリッカーを片手に持ち、先生から出される問いにレスポンスをしながら、先生との双方向のやりとりを交えた授業に熱心に聞き入っていた。

その後は、教員が考えるよい授業を聞くパネルディスカッションがあり、嘉悦大学短期大学部の白鳥成彦先生、本学文学部教育学科の斎藤里美先生、長谷川勝久先生に登壇していただいた。先生方の授業実践の紹介後、フロアに「学生が提出した課題などに評価などのフィードバックがあることはよい授業か?」など質問を投げかけ、クリッカーを用いてレスポンスをもらい、その結果をもとに登壇者の先生と会場全体を交えたディスカッションを行った。

午後は、グループワーク「The best of 授業 style ～理想の授業形式とは～」に、参加者全員で取り組んだ。所属大学が異なる学生、教員、職員の混合班で「理想の授業形式」についてアイデアを出し、議論を深め合うことができた。

成果発表では、各グループがまとめた成果に対して、フロアの参加者が画用紙の色を用いて感想を表し、活発な質疑応答が繰り返された。

今回のフォーラムを開催して学生、教員、職員の3者がそれぞれの視点を生かして授業の向上を考え意見を交わすことは、大学教育の質向上の第1歩であると強く認識する機会になった。今後も、学生FDスタッフが一丸となって、教職員の方々と連携しながら、「学生の主体的な学び」の確立に向けて、さらに取り組みを進めていきたい。

フォーラムで共有された「良い授業」の例

◇シラバスに授業内容が明確に書いてある

◇90分間の授業時間の使い方に变化がある

例えば、講義30分・グループワーク30分・発表と振り返り30分、で構成される授業
※グループワークは、やりっぱなしではなく、発表すること・振り返ることも重要

◇教員から、学生の発表、提出したレポートなどに対してしっかりとフィードバックがある

例えば、グループワークの後に発表と振り返りの時間があると、先生⇄学生、学生⇄学生のコミュニケーションが出来、プロセスや繋がりが理解できて理解が深まる。

◇パワーポイントの使い方が効果的であること

スライドを流すだけでは知識は身につかないので、パワーポイントは映像や写真などの視覚的効果のみに使用し、文章はプリントを配るか板書をとらせると良い。

◇社会(実生活)に関係した授業内容であること

◇課題解決型の授業

第2回「今、大学教育のこれからと学生参画型FD活動の意義を考える」

2013年3月9日(土)に、法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて、「2012年度第2回関東圏FD学生フォーラム」を開催した。

関西を中心に、全国に広がりを見せている学生参画型FD活動であるが、活動の進展に伴い課題、悩みも多く出ている。そこで今回は、学生参画型FD活動の更なる発展のために何が必要かを導き出すことをねらいとして、全体テーマを「今、大学教育のこれからと学生参画型FD活動の意義を考える」とした。

午前中のミニシンポジウム「テーマ：今、学生参画型FD活動の意義と展望を問う」では、原点に立ち返って学生参画型FD活動の意義、役割、抱える課題、展望を整理する場とした。シンポジストは、ファカルティー・ディベロッパーである芝浦工業大学教育イノベーション推進センターFD・SD推進部門長の榊原暢久先生、日本ではじめて学生による授業コンサルティング(SCOT: Student consulting on teaching)を導入された、帝京大学高等教育開発センター准教授の井上史子先生、追手門学院大学教育研究所で学生FDの学生代表を務められ、学生FDサミットの開催経験をもつ山下貴弘氏、現在は法政大学の職員で元立命館大学学生FDスタッフの平野優貴氏をお招きした。シンポジストの方々からは、「学生FD活動の発展的解消を目指す」という視点、「FD全体を見て何が必要なのかを考えよう」、「FDを戦略的に進める」というアドバイスなどが紹介され、フロアとの活発な議論が行われた。

昼食をはさみ、参加者が自分の興味、関心のあるテーマを選んで参加するラウンドテーブル企画を開催した。「教育を支援するプログラムとして

のFD」「学生に授業改善はできるのか」「楽しい学生参画型FD活動とは」などといったテーマを設定したところ、特に「学生による授業改善について考える」が人気であった。

最後に、初の試みとして参加者全員で全体討論を行い、ラウンドテーブル企画の感想も含め、学生からの発言が多数あった。

フォーラム全般として、学生参画型FD活動に関わる「成果」という言葉が多く出た。Facultyという組織全体に向き合う限り、成果はすぐに出てこない。そのような状況で、どうしたら持続可能な活動、取り組みを展開していくことができるのかを今後考えていかなければならないと強く感じた。

今回のフォーラムも、学生と教職員が一体となってよりよい大学教育を目指したいという熱い思いにあふれていた。学生生活の中心であり、言うなれば全てである「授業」に学生の声、思いを取り入れ、学生、教員の双方にとってのよりよい授業、大学教育を目指すことには大きな意義があると改めて確認する機会となった。

最後に、本年度のフォーラム開催にあたって、シンポジストの方々、参加していただいた皆様、学生FDスタッフ、支援していただいている教職員の方々に心からお礼申し上げたい。



第1回 パネルディスカッションの様子

平成24年度 東洋大学FD推進センター 活動状況報告

平成24年9月～平成25年3月

FD推進委員会

◆第4回

●開催日時：平成24年10月13日（土）10：00～12：15

報告1 各部会活動状況報告

報告2 センター長報告① TOEIC 指導者向けワークショップの開催について
② 第10 回関東東 FD 連絡会

審議1 平成24 年度 FD 活動状況報告会の開催について

審議2 授業評価アンケートのトライアルについて

協議1 平成24 年度一般教員 FD 研修会の開催について

協議2 新入生アンケート、卒業生アンケート、教育力調査、進学ブランド力の結果について（継続）

協議3 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（平成24 年8 月28 日）について

◆第5回

●開催日時：平成25 年1 月26 日（土）10：00～12：10

報告1 平成24 年度一般教員 FD 研修会

報告2 平成24 年度学部 FD 活動状況報告会

報告3 各部会活動状況報告

報告4 センター長報告① 第2 回部会長会議

② PFFP 研究会

③ 第11 回関東東 FD 連絡会

審議1 平成25 年度 授業評価アンケートの運用について

審議2 GPA 活用の手引き（リーフレット）の構成案について

審議3 平成23 - 24 年度 FD 推進センター活動報告書の刊行について

協議1 平成24 年度 F D 推進センター F D 推進委員会の活動の振り返りと課題の抽出

◆第6回

●開催日時：平成25 年3 月16 日（土）10：00～12：10

報告1 各部会活動状況報告

報告2 センター長報告 ① 2012 年度第2 回関東東 FD 学生フォーラム

報告3 平成24 年度授業評価アンケートの全学トライアルの実施について

審議1 平成25 年度 TA 研修会の開催について

協議1 平成23-24 年度 F D 推進センター F D 推進委員会の活動の振り返りと課題の抽出

部会長会議

◆第2回

●開催日時：平成24 年12 月22 日（土）11：00～12：40

審議1 各部会の活動状況報告

審議2 センター長報告

審議3 全学共通の授業評価アンケートについて

審議4 平成24 年度以降の F D 推進センター活動計画について

研修部会

◆第2回

●開催日時：平成25 年2 月13 日（水）10：30～11：40

議題1 平成25 年度 TA 研修会の開催について

議題2 平成24 年度研修部会の活動の振り返りと課題の抽出

議題3 平成25 年度新任教員 FD 研修会、一般教員 FD 研修会について

授業評価手法検討部会

◆第3回

●開催日時：平成24 年12 月22 日（土）10：00～11：00

議題1 平成25 年度 全学授業評価アンケートの実施要項について

学内公開活動

平成24 年度一般教員FD研修会

●開催日時：平成24 年10 月19 日（金）18:30～20:00

●会 場：白山キャンパス 5B12 教室

朝霞キャンパス 講 306 教室

川越キャンパス 511 教室

板倉キャンパス 3301 教室

※朝霞・川越・板倉キャンパスでは、授業配信システムを利用

●講 師：鈴木 典比古（大学基準協会専務理事）

●参加対象：教職員（公開）

●参加人数：約100 名

平成24 年度学部FD活動状況報告会

●開催日時：平成24 年12 月22 日（土）13：30～16：30

●会 場：白山キャンパス 6 号館 6203 教室

●参加対象：教職員（公開）

●参加人数：約50 名

平成25年度 東洋大学FD推進センター活動計画

（平成25 年4 月～平成25 年8 月）

学内公開活動

平成25 年度ティーチング・アシスタント(TA)FD 研修会

●開催日時：平成25 年4 月20 日（土）13：00～15：00（予定）

●会 場：白山・朝霞・川越・板倉

●参加対象：平成25 年度採用の TA

平成25 年度新任教員FD研修会

●開催日時：未定

●会 場：未定

●参加対象：平成25 年度新任専任教員（非常勤講師は自由参加）

第6 回授業改善事例シンポジウム

●開催日時：未定

●会 場：未定

●参加対象：教職員（公開）